

序説

脳血管障害は、一般的に脳卒中とよばれることが多く、急性期の医療の質によって予後が大きく変化する疾患である。その診断と治療法はここ10～20年で非常に変化してきた。血栓溶解剤であるrt-PA(アルテプラゼ)静注療法の認可に始まり、経血管の血栓回収術の進化に加え、直接経口抗凝固薬(direct oral anticoagulants ; DOAC)などの新たな抗血栓療法薬が多数開発されて、治療効果をあげている。さらに、2019年12月1日に「脳卒中・循環器病対策基本法」が施行され、脳卒中に対する医療の充実と高度化と併せて全国における制度整備を図ることとなった。

徳島大学病院では、rt-PAの認可以前の1999年からStroke Care Unitを立ち上げて、脳卒中の急性期患者を積極的に受け入れ診療を行っている。2005年より脳卒中センターを開設して、rt-PA治療や経血管的血栓回収術などの急性期医療に対応してきた。

本特集では、この脳卒中センターでともに急性期医療を担当してきた同僚の先生方に多く執筆していただいた。いずれも現場での経験に基づいた生きた情報を文献と併せてわかりやすく解説されている。特にwake up strokeにおけるFLAIR像の有用性や虚血灌流ミスマッチの有効性については、多施設研究成果も含めて放射線科医にとって必要不可欠な情報と考えられる。

さらに、基本法の5カ年計画の最終的な目標は、脳卒中と循環器病による年齢調整死亡率を5年で5%低下させ、かつ健康寿命を延伸させるというものであり、そのためには全国における脳卒中の診療制度の確立と均填化が必要となる。その解決策の1つとなりえる地方における“telestroke”の体制の紹介を、徳島県立海部病院の影治照喜先生らにお願いした。さらに、脳血管障害における新たな治療法と期待される再生医療・細胞治療について、北海道大学の川堀真人先生らにお願いして興味深い原稿をいただいた。

本特集は、現在考えられる放射線科医に求められる脳血管障害に関する最重要なエッセンスを詰め込んだ1冊となったと思っている。皆様のこれからの日常診療に大いに役立てていただけることを期待している。

徳島大学大学院医歯薬学研究部 放射線医学分野 原田雅史